いなほ

令和４年１月２８日
令和３年度学校だより NO.46①
加古川市立平荘小学校

狂言学習も仕上げ段階に！（６年生）

いよいよ本校の特色である狂言学習が、仕上げ段階に入ってきました。

１月２４日（月）の練習場の雰囲気が変わりだしました。１月１７日（月）の練習を受けて、一人一人のやる気はもちろんのこと、発声がぐーんとよくなりました。声が通るようになってきました。練習に臨む姿勢が変わってきました。

友達の練習を見学しながら、『**メモを取る子**』や『**演じている友だちと同じように体を動かす子**』、休憩時間に『**質問をする子**』等、真剣さが増し、主体性がでてきました。

一緒に演技の練習をしています

大切なポイントをメモしています

自ら質問をし、どう表現すればいいかを相談しています

≪１月２４日（月）の狂言学習より≫

●後見の役割

舞台の上は、客席より一段高い所にあります。そのため、観客の目を引きつけることになります。演じる者だけでなく、後見の役割も演技です。後見の動きが、観客（の印象）に残らないようにすることが大事です。セリフを言っていない時に、観客の目に付くことはしません。つまり、後見が動くと、演じている人ではなく、後見の方に観客の目がいってしまうので気をつけましょう。

後見は、自分の前に演じている人の動きや位置をよく見ておきましょう。次に自分が演じる時には、前任者の位置や動きを引き継ぐことがポイントです。

●役になり切り、思いを届ける

『附子』は、太郎冠者・次郎冠者にとって、正体がわからないものです。正体がわからないものほど怖いものはありません。その『附子』に近づいていく太郎冠者や次郎冠者の心の動きをよく理解しながら表現することがポイントです。「あおげ、あおげ」「あおぐぞ、あおぐぞ」と言っている時の二人の気持ちや、『附子』（大の毒）から風が吹いてきた時の太郎冠者と次郎冠者の気持ち、互いに相手を信じたいが心のどこかで信じきれない二人の気持ち等、心情を分析すればするほど工夫した表現ができます。また、太郎冠者と次郎冠者の性格を動きで表現すると益々おもしろいです。太郎冠者は少し大胆な性格で、次郎冠者は少し小心なところがあります。主人・太郎冠者・次郎冠者のキャラクターを自分たちで解釈し、それを話し合いながらチームとして主人像・太郎冠者像・次郎冠者像を創りあげ狂言を仕上げていってほしいと思います。

●観客を意識しながら演じる

演じる者は、観客の目線を感じながら演じることが大事です。観客に演じる者の思いを届けようとして演じることが大事です。演じる者が、観客を意識しないと、舞台の上で孤立してしまいます。

『附子』の作品では、常に「附子」を意識しながら演じることがポイントとなります。演じる者が、「附子」を意識すると、観客も自ずと「附子」を意識します。

『附子』はどんな味がしましたか？どういう気持ちで『附子』を食べましたか？『附子』のイメージで扇子の持ち方や食べ方が違ってくるよ。

●演じ手の心をつなぐ

自分の前に演じている人のセリフ（思い）を引き継ぐことが大事です。セリフを言っていると自ずと感情が沸き起こってくるものです。みんなで一つずつ作品を創っていきましょう。

狂言学習を通して、子どもたちが成長しているのがわかります。